

何と呼ぶ

上月 日生

叩けば、きいんと鳴りそうな夜だった。肌をなげる風はひどく冷たく、薄皮を削ぐようにして流れていく。えらく中途半端な形の月が空の端に引っかかっている。中途半端、私と同じだ。唇がにんまりと笑みを形作る。あれに少しでも近づきたくて、ひとり地面を蹴った。

昼間なら子どもの声であふれかえっているだろう小さな公園は、私が揺らしているブランコが時折甲高い音をもらす以外は沈黙を守っている。零下に限りなく近づいた空気が、手袋をしていない裸の指先を冷やしていった。三月のくせに冷え込むなんて生意気だなどひとりごちてみたけれど、ここまで冷えれば麻痺したところから夜に融けていける感じがして嫌いじゃない。もう少し、もう少しですべて融けるかもしれない。辛うじて残っている感覚をかき集めて、ブランコの鎖をきつく握りしめる。

そのとき、砂利を踏む音が沈黙に割りこんできた。

「……こんなところに、居たのかよ」

視線の先、公園の入り口には見知った男が立っていた。全力疾走でもしてきたのか、肩は上下して、吐く息は私のそれよりも白くて荒い。こんな夜中に、人捜しにかけずり回っていたのだ。なんて可哀相なひとなんだろう、うっかり私なんかの兄だったばかりに。

「お前さ、病院抜け出すのもいい加減にしるよ。ただでさえ検査でいろんなどころ参ってるのに余計な負担ばっかかけて。体、保たなくなるぞ」

苦々しいその口調に、心の中で舌を突きだした。保たなくなる、その言葉は言外に『つまり最悪の結果』を含んでいることを私は知っている。

いいじゃないか、と思った。どうせみんながみんないつかは辿る道なんだ。それが早いか遅いか、それだけ。今生きてるあんたもいつか死ぬんだよ。私を追いかけるのに時間を使うより、もっと有意義なことに使った方がいいんじゃないのか。

ブランコを漕ぐ足は休めない。視線を合わせず知らんふりを決め込んでいると、

「ほんとお前、いい加減にしたほうがいいよ」

すぐそばまで近寄ってきた兄は、前置きもなくブラコンの鎖を掴んで強引に止めた。遠心力でぶん、と振られて歪な軌道を描きながら両足が地面に引きずられる。妙な力がかかって、麻痺していたはずの指先がじんじんと痛んだ。苛ついたような溜息が耳朶を打つ。

「あのさ、もう我慢ならねえから言わせてもらっけど。正直言つて迷惑なの、めいわく。ひとが寝てんのに夜中に叩き起こされて、病院抜け出してふらふら歩き回ってるお前捜しに行くのって、ほんつと面倒くさいんだよ」

常ならここまで感情をあらわにしない兄が、頭をがしがしとかき混ぜて静かに呪詛を吐いた。生まれてからずつとつきあってきた兄だけど、明らかに敵意をむき出しにされたのは初めてで一瞬怯んでしまう。けれど同時に、やっぱりなと思った。

ほつら、どうせこんなもんだろつ、ひととひとの繋がりなんて。生きてりゃこじれる、死んだら切れる。家族だからって特例はない。吹けば飛ぶような、つっぱ崩れるような脆いもんだ。笑い出したいくなつた。でも、どこか胸の奥がちりちり焦げたみたいなの、痙攣を起こしたような笑い様になりそうまで悔しかった。

「……それでもやっぱり捜しに行くんだよ。そりやそ

うだよな、反抗ばつつかの鼻持ちならない奴だけど、お前病人だし、妹だし。でもな、それ以前の理由があんだよ」

「……何、それ」

「お前まだ生きてんだろ。死んじまったら捜すことも出来ねえの。お前はすぐく嫌な妹だけど、まだ生きてんだよ。今寒いだろ？ 判るか、生きてる奴は心臓動いてつから温かいんだよ。冷たいのには耐えられないんだよ。」

だから面倒だけど、生きてるうちは追いかけてやる。引きずつても連れ戻しに行つてやる。お前が病氣治して甘つたれた根性叩き直すまで、何度でも。俺自身そういう腹だつてこと、最近知つたんだわ」

弾かれるように顔を上げると、兄は不機嫌そつな表情のまま私を見ていた。

「あんまりひとに迷惑かけんな、生きてんだから生きる、ちゃんと生きる、死ぬまでは生きとけ」

ああ、この気持ちを何と呼ぼう。

探して、見つけたあんたは、何と呼ぶのだろう。

出し抜けに右手が突き出された。どうやら取れというこたらしい。最後に手を繋いだのはいつだったか、はるか太古にまで遡るんじゃないだろうか。視線をさまよわせていると、早くしろよ、と急かされた。

そうしてそろそろと左手を伸ばし、これまで見過ごしてきた熱を押し戴いた。やわらかな温みが、指の先から脈を伝ってじんわりと届く。兄はもう一方の手で包むように握り返してから、よしと呟いた。

ここにきてようやく気付かされた、ひとは哀しいくらいあたたかかった。誰も彼も生きている。この場所に息づいている命すべてが、寒さに凍えないように熱を帯びて生きている。融けきれなかった私もまだ、どうにかもがきながら生きていた。

「ほら、帰んぞ」

ぐい、と繋がれた両手で引つ張り上げられ、腰を落ち着けていたブランコが鳴く。よろけた私を風が笑った。中途半端な月が静かに見下ろしていた。病院までの道のりは少し長い。何を話して帰ろうか。何も話さず帰ろうか。

かの右手とこの左手は未だに繋がれたまま、外灯に照らされてまるで仲良しの兄妹みたいに影が伸びる。

36.5、  
て泣いた。  
火傷しそうな命のあたたかさに、隠れ